當流茶之湯流傳集 三

當流茶之湯流傳集巻之三目録

五節句之花正花之習
花心之前并心得ニ付廿九ケ条之習
炭之出生
廿七ケ条炭ニ付習并一巻
廿色炭ハ墨秘〻圖
炭の寸法并风炉炭之習
炉灰並濾之習
风炉ニ但伏様日土器ある之寸法
炭之極之習
あへ炭不足之習
菓子炭之習　片口之習

當流茶之湯流傳集巻之三

床茶并花

嫌ひ花之習

一茶之花　萩　荻　きんせん花
けいとう花　ゆり百合の類　ほう仙花
女郎花　かる桔梗　かうや　まきさゝ
花いざさ　三まいの花　さゆまきさゝ
一床の花ハ床の内客居の方角柱へ寄せ
一客の花ハ勝手の方床の角柱へ寄せ
一茶飯の花ハ堂ヒたび立寄どする人を
よめハけ花を正花ニ用べし　又茶飯(サニ)花を

中口花生

客方

かり

黒文字蔵板

飯銅（ハンドウ）

蓮ノ一色

置舩
客方
おりしれ枝
福寿草
置竹籠
シキカゴ
客方

客方

花出舟

大舩

客方

花出舟

丸舩

客方

花ハ入舟

小舩

竹百夜(スンド)切鯰花入

大花比拵

客方

二重切
筒花入
一重切竹無花入

大籠懸花入
なんてん
梅もどき
かし
巾着花入

桐花生
志うかいどう
たつひ絲花入
冬至花此習

右十七ハ花生に有故可く此とし か花のなるをハか
見るといへとも此十七ハ花之花にかたるをちがいハ
なきことに有敷けれ共大小給る生るたるへハ小きもの只
高花生に入候よ生る切ハ爲まり候花のうに心得すに
生る小きもの歟又花へ、いくまに大なるまきへとて
まに致生花よハ十七の花生をこしとへ置と見る生
花ハ座をを持まる品へ座まくを花生に給て
何ほどの大なる花とてもすべてなまきん主花
入花ものうどう響すまハ大花を入てし可し文
たりハ花へ取との恵ぎき花入よハ小花ふお抱ゑ
猶口傳深し

一 主人此なる縁先のうけ掛たる人ハ右の方に主人
のある時ハ左のかより座へ出る也何時も主
人のある方を受て座へ入なり
一 三つ釘ハ無此釘ハ上の方へする中の釘
かまちの方下へする是秘事也
一 床に壺を飾つ荘る時ハ壺中に壺 釉先に
清香をかさる事ハ壺ひきき時ハ清香を
中真に壺釉先に飾る
一 或日信長公御床に松禍三ケ月の壺を飾
まいらせ候ハ信長御意に此花を見せよとさ
仰せにより二つ入たるしの花を生ける上にハ

住吉門松不斜能き下合ト沙汰ス
一 主人此御座敷に壺を置て又ハ人々に蒙て
すがたを見せる事ある時ハ立花ハしかくる大
きく勝を座のおもてにつきかけるべし
一 或曰萓能何陰ハ陽花此御道に行る時能い
陰を陽花此方へ口切よりて外に座敷を
客大方ある口此花生に水を一そゝ入花ハかし
能何陰陽主人にとてなし陽花我を花に用
たるを深くかんじふるゝ也
一 宗珠茶院此花を無茶のト小壺を盆
に乗く座敷に出す時此茶一ふくり入

之と云作人宗珠大文此小壺を座敷にて上方
ニハ入乃数とかて手時座に観をみく云六
り座敷へ入也あるへハかゝる心づけある也
一 門成此時座より白をかゝるに糸をさと云
物あて風吹かとの時ある物を吹上る事有故
ある事に糸をつけ白き糸ある下一文字ト中
に花あるをとるこめ置す是ハ風吹なし物き扨
事有し口伝
一 花を生る元三日ニハ梅上巳ニハ桃 端午ニハ
せうぶのすゝきをかせうぶを菖蒲に入る七夕
にハ蓮 重陽にハ菊を生る是実流の習

一かやの此花入露の付様小遠江のこのみたる也
花生桶とも云を掛けつき湯を入うらにけしき
中へ花生入置べし露付とあるは此花生し花を生
所は床へ上る事経露をふる愚僻なるの
花生を水をかけくもるは縦ひ花を
一つまとみな時井の水をくみ上水を入るべし口より
おれぞうり浙出て露出るは自ら露と露
のかゝるやうなく露を持也

一或曰路會に嫁花を入茶此時茶壷文飾文
ぞうの床飾りにかざりけれ其ば茶を

一或曰花よきしくむ也と云事あるかさくさる

一寸を上此花よりまくずしもかゝる様に出る

一或曰水仙早梅茶山花椿は同じあまく入まじき
うるみなく開きて変ぜし時は桶につけくもろくに含さい
くみと知時も開くなく開也

一或云
庭にかゝる花とは家の床に生まもれて全の前の置き生出へ
生くたく花と葉の数をく見へさう入る時は色をかしとよ
床へ向ひ物へも成て見出く方を深くに向ひて低面て見よ

一千本此道庭をそいろと梅と二通入ること宗珠行
也ければそれぞとても人へ同じ也を渡さる人信路
よ従ひましく立仕の花は立て活るゝと也

一豆此古時分庭に花生る事有之能出来一般
能客有ハ人ならし苦し自然座る花を入る
まゝ何ハ其花方へ面(ヲモ)てをひさま勢二アある
或人物語也

一生花ハ中ニに中枝(ナカシ)をもととする故にまいらく
と花のつり合を生(イケ)なせが大事心ハ二ツ也又
ちすらのうし花ハ小ニ生ルハ下ヲして見よき
花ほ山に生る事ハ切者のするわざ也

一度ハきらせたる根をたきけ湯に根をつけ大ら
せさくさてねてふかくつけくさくいを之
花のもとをおつてをわけかわる物と又花

生此中へし水に湯をまぜたるがよし

一芭蕉葉河骨(カウホネ)沢桔梗なとの水草をきるには
まけ糸にて根をくゝりて其下を切べし水をつくして
よくこたえる物也

一仙翁(センヲウ)花がんひ蝋しぐろなとは切口を焼き節く
をたちきりたるが水をよくあげ花にハ水をか
くる事よろしき也

一花に輪鋒(リンテ)あるある花にハ楊枝其先る焙を
輪きハに付べし然共ハ一二の法花不(モ)立の法也

一何も時コア去ル切者なるたと俗人(ハヒ)其方へ茎筒
に任(コキ)るてハ其花のまわりに花を右此に

一小もの二幅対かゝる事あらは花生るに定（サダマリ）て常の事也

一法（ホツ）事なとにかけ物のかゝる床のかけるに随花入をも花を生る中立にてもかへて生るへからる事也

一近年は花は生ぬ仏法と云花椿なとを生る事は何も此間は生花のやうに行水肩絶也

一或問
女郎花ゆゝかゝりや生んせん花
せん生ひる事ともきらひ候事也

口伝花生ま

一蒋魴が切韻に炭は仙人嚴（ケン）青（セイ）が造（ツクル）也と云
字書に焼木末灰（タ）を灰の炭といへる者と傳を

一或書に炭は墨斗（スミトリ）之車の葉は葉籠（サイロウ）の紐（クミ）物を用る也
瓢は大瓢（フクベ）は瓢を付く代るへし必葉（ツキ）を付へし

一炭箱（バコ）は名物口傳は東山殿の時古き炭入
なる炭箱にて字下紙に紙へと下り八代
炭箱は上（カミ）は炭を切るとこ下は紙箱
など道ゆかれますぬ筆へ上へは一
紙ら御方に入法はあとめ名物（ゴモツ）とかき故
紙には紙がきまりする箱（ハコ）とて炭箱のきまる

出香のすきこそ座敷淋しきとや炭をせずして面白き
炭ハたゞ大小を切揃ひてかきせきまぜハよきなりてよし
一 夏ハぬくへばれ炭入よ添付の香合さわり大切　つゝみて
一 冬ハかゝるれさびしう除ての香合抛付大切
一 風炉の炭ハぬる客をよぶへきと思ふ時と昔より
黄炭又ハ定番の炭とすること古めかしき作ぬる
いるゝうひ新茶よ入たる梅宮来の外風炉の炭
とするなり風炉の炭の法ハぎやうとすること風炉
の法ハ昔よきつけざるとはなきもかなきあかり
一 奈良風炉の新茶ハそこよごらし火の土器を内へ
炭一まい入てむけるとりを低るゝるなり風炉の
そこ裏乳足にあるを奉書ゐる内へ入ざる様に
ゐるなり口伝
一 土鍋の底を内へ入ざるほどよ紙ゐるゐる也
一 下炉立法の下の輪をおく二方をかくこ口伝
一 炭よ謡ると云ゆるも炭入の炭を殊て我すゞ
きと思よ炭をハいろいろにして茶の炭を差大切
じいうへハ人々入ると思ひゐる所を右二分を思よ
一 炭を入へも思をかゝるると云
一 切目の立茶土のハ茶の上よ茶の炭を不去
一 炉土法の三つ爪の土據ハ以前の炉に仏をかぎだ
今えの方へ向ゐる足とするなり

かりほと白き炭うしろき上へ白き物を打くゆへき
りじりをしてよし
一白炭よきかと云ハ灯きる之白炭の本性ハ行る也炭
し切之口伝
一或曰雲龍ハ釜を灯よかゝる大行る也二法を大切
ら也てよするときりをむ道理よ叶
一あらも灰ハ椴梲黄灰を仕始ひ候ニ入始のこを
のべてうきませてほろくよして行始るひくし始るい
ぬき用よ分也
一香合よたき物を入るよ二ツ三ツかさね一ツもる
へ加羅ハもとを入るこし

一真ハ炭形
五角
丸台　丸相手
割炭三中輪一
白炭割也

向台ハ炭形
一五角
丸台　長割炭
大輪　小輪　白炭枝
割也

一 臺残(ノコリ)の立(タチ)炭(スミ)形

三角

臺すまし巴炭はよ花き

つぎ形ニ大輪(ハ)大割(ワリ)

白れ好み炭割木

一 割臺丸炭形

三角

丸臺大割三ツ

小輪長白枝(エダ)炭(スミ)

一 樋臺(ヒダイ)炭形

三角

大割炭細(ホソ)炭(スミ)枝(エダ)白

炭輪(ハ)炭図(ズ)炭なし

一 割臺(ワリダイ)炭形

五角

丸ぬき炭

大輪細(ホソ)炭(スミ)白炭壱本

一 先ず通おして此牛蒡形
六角
向丸茎長細牛蒡

中輪白牛蒡二本

一 櫓輪此牛蒡形
白牛蒡を五角に丸
割(ハリ)茎(タテ)中丸牛蒡

白牛蒡壱本

一 輪(バ)違(チガイ)牛蒡形
五角
割(ハリ)茎(タイ)おりてあるし大輪
割り

白牛蒡壱本

一 拍(ヒヤウ)子茎(ダイ)此牛蒡形人
一 四角牛蒡を白牛蒡二つ点
入れて五角ニある
長割牛蒡割り

大輪白牛蒡五本

一三角
白炭六本
一九角
曲細大輪
白炭三本
一七角

一　割臺炭形
五角
臺　打手　細炭
大輪白炭　斜

一　打手臺丸炭形
三角
大割　打手　之臺付
大輪長細炭　白炭
四本

一　大輪臺九炭形
斜角
大割斜リ
白炭五本

一　向曲臺炭形
五角
大輪長細炭
白炭三本

立炭形

一 弐角
大割割り曲了細炭
小輪白炭二本

一 五角
枝炭れ炭形
大割長割炭
中輪白炭二本

炭寸法

一 臺炭長サ七寸小口壱寸八歩から弐寸まてよし
一 桐子炭長サ四寸小口弐寸より弐寸二三歩まて
一 割炭弐寸五歩から四寸まて除く二割之
一 輪炭たけ一寸くしし八歩くしと
一 細炭八寸より九寸四歩まてく九炭割炭也
一 中炭四寸六歩九炭 くぐ炭一寸五歩
一 立臺炭ひいき臺割臺皆たけ弐寸

風炉之炭

一 三寸四歩又三寸よ臺とする小口臺一寸四歩

炉炭立法之図

くる芝し大燒の時ハ凡炉のしくに灰を手近
一置すへ紙ハ奉書四ッ折にして二寸六分程に切て
奉書の紙小ぎくを用べし紙数ハ十六枚
によるべし
一炉ハ白炭の先を向へなしてかを向へすべし
風炉ハ白炭の先をあへしてかを向へすべし
炭嫌ハ習
一十文字　志とく　輪炭を表様にする事
割炭をうけむけるより　かけくべし
五徳をさむ事　輪ハ上に案の炭を置事
右へ炭所望あれ時事

一客へ炭所望あれ時ハ紙炭取りさあらバ八寸に
紙を敷きよく炭を入て出すべし
下火多き時ハ土田之内へ入ても入庭候長ヶ
大節を置揃おそて候し火移すよ大
節し並に右之八寸揃客へ所望する也
一所望する時を右て土田を揃おき庭にまかせる
一客炭する時ハ帛紗にて八寸を揃へ右肩へ
入ても炭よりも時より取りまれ
置たる炭まずからぬを所へ掃のせて
を紙消をも用て炭すると又向に並置
まとる薫物を入る所ハ下にて立て釈ハ

投入の事なり

行白の次第

一秋の比口切よりよく年の比春まて八陰行白
を主とし茨風炉の比八赤陀行白を主とし又陰行白
よ八蓋置を出し赤陀行白よ八蓋置を主とす
帛巾八何ともあらし

香子炭之事

一香子八冬活ゆへ故土器まくとも一炭八おく付
まひと故よすゝめし何すゝしも炭斗に入候得
為らんによらけ大概香之香合に入持出炭を
する也風炉の比の事なり